

「それは、自ら望んだことなのか。それとも、否応なく巻き込まれたのか。

もうわからない。わからなくていい。

ひとつだけはっきりしているのは、彼女の口からあの言葉がこぼれ、僕はその言葉に望んで囚われた。

それは私自身が強く望んだこと  
そうだったのだろうか。  
彼がそう望んでいることがわかつたから。  
だから、彼の望みどおりにしようと… そう思つたのだ  
るうか？

わからぬ。  
自分は何がしたかつたのか。  
それでも確かにことは。

彼ヲ  
彼女ヲ  
アイシテル

ジョーは突然強く振り起こされて目を開けた。いつもとはあきらかに違う状況に、一体何が自分の身に起こったのか、しばらく頭が混乱する。

もぞもぞと毛布から顔を出して、そこにあつた意外な顔をたつぱり30秒見つめてからやつと声が出た。

「悪い、ドアが開いていた。博士が手助けを欲しかつてゐる。すぐ研究室へ来てくれ」「わかった」

「起きてるか?」「何が

ジエロニモは手近なところに置いてあつたタオルを手渡した。

「まだ寝てるだろ？ 顔を洗つてから来い」「もちろん。起こしてくれてありがとう」「男同士だからとジョーはその場でパジャマを脱がだしき」とおおきな声で叫んでくる。

「遅れていた研究資料がやっと届いた。荷解きは終わ

ジヨーの部屋のドアが力強くノックされた。  
中からの反応はない。  
ジヨロニモはもう一度ドアを叩いてみた。しばらく様子をうかがってみても、ジヨーが起きだしてくる気配はやはりない。  
「ジヨー、いないのか？」  
声をかけながら軽くドアノブに触れてみて、それがあつさり回ることにジヨロニモは驚いた。ためらひながらもそっとドアを開けて部屋の主の所在を探つてみる。  
部屋の中は朝の日差しで明るい。少しの隙間からでもベッドの位置は確認できた。  
ジヨーは窓に背を向けて、毛布を口元まで引き上げてうつ伏せるように眠つていた。  
多少のことで起きた気配はない。  
もう一度、壊さない程度に強くドアをノックしてみた。  
ジヨーが嫌そうに毛布にもぐりこんだのを見て、ジヨロニモはあきらめた。  
「ジヨー、悪い。入るぞ」  
ドアを大きく開けて部屋の中へ入ると、ベッドのジヨーへつかつかと近づいて毛布に手をかけた。